

“柔らかな頭”で社会現象を多面的に見つめたい

齊藤 潤一 構成 河野 尚行

東海テレビで司法をテーマにした数々の優れたドキュメンタリーを制作してきた齊藤潤一さんに、個人・グループ部門 放送文化の賞が贈られた。既成概念や社会の風潮に流されない視点を貫く作品で独特な存在感を示してきた齊藤さんは、番組の劇場公開に取り組むなど、ローカル局としての新たな試みにも積極的だ。さらに、今年6月に放送した名張毒ぶどう酒事件を扱った番組「約束」で、初のドラマ監督にも挑戦している。放送文化の審査委員・河野尚行さんが話を聞いた。

河野 齊藤さんの番組は、ほとんど拝見しています。番組は、再審問題、それに裁判官や検事、弁護士への密着取材、更に被害者や受刑者のその後など、司法関係のテーマで占められています。ユニークな存在ですね。

齊藤 2006年に、三重県の名張毒ぶどう酒事件の再審を扱った「重い扉」が私の最初の番組です。再審が開始されない裁判の理不尽さに疑問を持つと同時に、ごく素朴に、裁判官の日常の仕事はどんなものか、検事の場合はどうか、注目の事件を担当する弁護団の仕事は、と次々に関心が繋がっていきました。裁判員制度の開始などで、世間が裁判そのものに関心を深めた事も追い風になりました。

世論に流されず逆の視点を合わせ持つ

河野 最近の戸塚ヨットスクールのその後を扱った「平成ジレンマ」、死刑囚の弁護を何件も引き受ける弁護士を描いた「死刑弁護人」。いずれも、番組の中で、取材対象者が、世論に迎合するマスメディアを鋭く批判をしています。齊藤さんの体験と何か重なりますか。

齊藤 主人公の2人の批判は私へ向けられたものでもあると肝に銘じて制作しています。ニュースの取材をしていた頃、結局その人は不起訴になったんですが、容疑の段階で、バーンと顔写真を出してしまい、自分の取材の未熟さを味わいました。やっぱり一方的な取材方法はだめで、逆の視点をきちんと合わせ持たないといけないと反省しました。光市事件で、弁護団が鬼畜とまで世間からバッシングを受けたとき、弁護団は何を考えたのかを探ったのも、そんな経験が生かされていたのかも知れません。

映画化で得られるものは？

河野 「平成ジレンマ」「死刑弁護人」二つの番組と



齊藤 潤一 さん 東海テレビ放送 報道スポーツ局 報道部 編集長

1967年愛知県生まれ。92年東海テレビ入社、営業部を経て報道部記者、県警キャップなどを経て、ニュースデスク。2005年より番組制作。2012年7月より現職。主なディレクター作品に「重い扉～名張毒ぶどう酒事件の45年～」、「裁判長のお弁当」、「黒と白～自白・名張毒ぶどう酒事件の間～」、「光と影～光市母子殺害事件弁護団の300日～」、「罪と罰～娘を奪われた母・弟を失った兄・息子を殺された父～」 「検事のふるしき」 「毒とひまわり～名張毒ぶどう酒事件の半世紀」、 「平成ジレンマ」、「死刑弁護人」、「約束～名張毒ぶどう酒事件・死刑囚の生涯」など。受賞多数。

も映画館上映を展開します。映画への進出です。全国ネットが思うようにならないローカルテレビの番組制作者として、その思いは十分判りますが、ペイするのですか。

齊藤 映画の宣伝費として数百万円の出費がかかるので、金銭的には無理でしょう。でも、今まで全く接触がなかった全国規模のメディアに関係記事が載ったり、入場料を払って観ていただいたお客さんから熱い反響が届くなど、制作者としては凄く有り難い。会社にとっても、ドキュメンタリーの東海テレビの宣伝効果は十分あると思っています。

ドラマ監督に初挑戦

河野 さて、そのドキュメンタリーの東海テレビが、6月末に放送の最新作、名張毒ぶどう酒事件を扱った番組「約束」で、ドラマに乗り出しました。監督は齊藤さんです。また、どうして“ドラマ”ですか。

齊藤 これまで、3本、名張事件の番組を制作してきましたが、奥西勝死刑囚の心情をどうしても描く

ことが出来ませんでした。確定死刑囚の場合、弁護士とか家族しか面会は許されず、手紙などで間接的にしか、その心情は表現できません。今度はドラマの力を借りても、奥西死刑囚の長年の独房暮らしと、その思いを表現しなかったのです。局内でも、再審が進行中の事件をドラマ化することには、いろいろ意見はあったのですが、阿武野プロデューサーの尽力もあって実現できました。ドラマは初体験でしたが映像制作者として新たな表現の可能性、醍醐味を味わせていただきました。

河野 仲代達矢、樹木希林といった名優をよく引っ張り出せましたね。

齊藤 仲代さんは、以前番組のナレーションを担当して貰った事もあり、お願いしやすかったのですが、樹木希林さんの交渉は大変でした。外国の映画祭でたまたまご一緒しただけの縁でしたが、どうしても、死刑囚の母親役を希林さんをお願いしたく、何回となく執ように交渉しました。OKが取れると、希林さんは事件現場の集落の下見はする、死刑囚の妹さんを訪ね、母親について聞き取りはするなど、その勉強振りは凄いものでした。

東海テレビはもとより、中学生日記などを制作していたNHK名古屋の周辺にもドラマを作る専門集団は既になくなっていきます。照明や美術などの特殊技術は、昔、経験があった技術さんが、思い出しながら乗ってくれました。

河野 その他にもご苦労が…

齊藤 自分でシナリオを書くのはじめてだし、カット割りもはじめてです。頭を痛めたのは三畳の独房生活の再現で、元死刑囚の免田栄さんにも取材はしましたが、細かいことは独房体験6年の戸塚ヨットスクール戸塚宏校長に協力を求めました。

河野 それで、番組の協力者のテロップの筆頭に戸塚宏、と名前があるんですね。

齊藤 戸塚さんは、台本制作時にも、撮影の時にも、立ち会ってくれて、細かい指示を出してくれました。長年の「司法シリーズ」の力が番組に結集した感じですね。

長年積み重ねた取材に基づく踏み込んだ番組作り

河野 「平成ジレンマ」も「死刑弁護人」も取材相手の懐に飛び込み、二人の人間像を見事なまでに描きながらも、どこか冷めた観察者の視点も持ち合わせています。特に「平成ジレンマ」は、取材対象とは距離を置く姿勢も感じられます。だが、この「約束」は違う。

番組全体が、一歩踏み込んでいます。その理由を聞きたい。

齊藤 51年前に起きたこの事件に関して東海テレビには、先輩たちが積み重ねてきた膨大な取材資料が残されています。私も既にこの事件で3本の番組を制作し取材を積み重ねてきました。その結果、この死刑判決は冤罪だと確信しています。一歩譲っても、「疑わしきは被告人の利益に」は再審にも適用されるとの白鳥決定（1975年5月最高裁）もあり、少なくとも再審の扉は開くべきだと思っています。この件で、私達は形式的な公平中立の立場は取りません。この番組に対するあらゆる批判は覚悟して受けるつもりです。

河野 司法に呼びかけるラストコメント。それに続く仲代達矢が演ずる年老いた奥西死刑囚が、故郷の名張川の縁をさまようイメージショット。視聴者は、どう受け取るでしょうか… ところで、齊藤さんのこれからの仕事は。

河野 尚行 さん（こうの・なおゆき）

放送文化 審査委員

1962年NHK入局、報道番組ディレクターに。札幌、北見、高松、大阪局を経て、NHKスペシャル番組部長、編成局長、放送総局長などを歴任。



報道部門での新たな役割

齊藤 番組現場に未練を残しながら、今度、久しぶりにニュースの取材部門に戻り、ニュースの編集長になります。

河野 それは、東海テレビの組織的“知恵”だという感じがしないでもありません。齊藤ディレクター、阿武野プロデューサーで制作した東海テレビの番組はいずれも放送史に残る名作揃いです。この7年間の番組制作経験を、齊藤さんは今後の仕事にどう活かしますか。

齊藤 先ほども、お話したように、時間に流されて、一方的にものを見るだけではなく、常に、多面的に社会現象を見つめるよう心掛けたいと思います。それが、番組制作を通じて頭が柔らかくなった私の役割です。そして、日々の激しい時代の動きの中に新しい時代のテーマ、新しいネタを見つけ出したいですね。

河野 こうして話を伺うと、齊藤さんに放送文化基金賞・個人賞をお贈りして良かったなあと改めて思います。

齊藤 有難うございます。うれしいです。